

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品： 竜とそばかすの姫 その4

前回のおさらい

I. すずは何故歌えなくなってしまったのか？

II. すずにとって『U』とはどのような存在であるか？

すずは幼い頃母と一緒にスマホの鍵盤アプリを使って音楽を作ったり、一緒に歌ったりとイキイキとした交流をおこなってきた。その交流が内的世界と外的世界を結びつける潜在空間であると考えている。

一般的にその潜在空間で創造的な遊びを続ける中で、人は徐々に親から分離した一人の個として主体的に現実世界に関わるきっかけを作っていく。しかし水難事故で母を失ってしまい、その空間が剥奪されてしまった。高校生になった今もその喪失が受け入れられないすずは、『月の裏側（ヒロちゃん評）』のように外界の世界から距離を置いた高校生活送っていた。

高校生のすずに大切なことは、幼い頃母に見守られながら夢中になって歌い、音楽作りをしていた空間を取り戻す必要がある。つまりもう一度、潜在空間で自由で創造的に遊べる様になることが必要。

その空間が、ヒロちゃんが招待した『U』である

『U』を通じてすずはどのように変わっていったのか？

『U』の中ですずはベルになることで歌うことができ、尚且つ彼女の歌声は瞬く間に高評価をうけ、その世界でディーヴァとしての地位を獲得しようとしていた。そのことがすずの自信につながり、それとリンクするようにすずの現実世界の高校生活が少しイキイキと感じられ、彩りを持ち始める。

すず自身の高校生活がイキイキと感じられ、彩りを持ち始めた後に、彼女が向き合うべき心の課題は、自身の情緒的葛藤に向き合うことである。まさにそれが社会に関わる（エディプス葛藤）ことである。

思春期の到来によって生じる喪失

一般的に思春期になると、心身の成長の中で、主体性が立ち上がり、親からの自立、自ら人生の岐路を選択し、また成長に伴い、今まで理想な存在であった大人たちへの幻滅も生じ、学童期まで抑え込んできたエディプス葛藤が再び持ち上がり、彼らは自分自身のアイデンティティが揺らぎ、その中でいくつもの課題を抱え、ここの様なことを経て彼ら思春期の世代に年齢の子達は（それが Adolescence Process）その情緒的葛藤を乗り越え、一人前の大人に成長していく。

そのエディプス葛藤が鮮やかに描かれたシーンが、密かに思いを寄せていた、幼馴染のしのぶ君から学校で声をかけられたシーンである。

そのシーンですずは、しのぶ君から学校で声をかけられたが、途中、周囲の視線が気になり、踵を返し、振り返ったら時には、しのぶ君とルカちゃんが談笑しており、そこに入れない気持ちになっていた。

そこにはすずがその関係の中に入っていきたい憧れの思いと同時に叶わないという葛藤を感じており、今後のすずの課題としてその葛藤（エディプス葛藤）に向き合うことが必要不可欠。

→母の死を受け入れられないことによって止まっていた Adolescence Process を進めていくこと、つまり思春期によって生じた、すず自身の様々な情緒に向き合っていくことが必要不可欠である。

→そして『U』にて、ベルのコンサートに竜が出現してくる（悪い対象）
個人的にはこれがすずが内的世界の中での父の存在（現実世界で、すずが父に対して必要以上に距離をとり、関わることを拒絶しているのは情緒的に触れられることが怖いから）の様に感じられる。

Ⅲ. 竜はすずにとってどのような存在であったのか？

1. 竜とは？

『U』の世界でモンスター型 As。黒い竜のような獣の姿をしている。

→その存在こそ、すず自身が距離を置き、分割して、否認してきた自身の情緒であり、それを外的世界に投影し、悪い対象としてきた。しかし、すずはその竜の姿になにか惹きつけられた様にすずは、ここで自身の感情に向き合おうをし始めているように感じられる。

「傷つけられる……。竜の背のあざ……。もしかしたら……。」

すずは竜に強い関心を持ち、竜のお城へと入っていくが、それはすず自身が抱く心の世界に関心を持ち、そこに探求しようとする思いである様にもかんじられる。

2. 竜と出会うこと、そして現実でおきたこと

1) はじめての竜との関わり～現実での出来事

竜のお城に導かれるように入っていったベル。

そこで竜に出会うが、ベル（すずの As）に対し、竜は恫喝するが、周囲の As に対して優しい竜をみて、すずは物想いに耽る。（「すずが恋してる。それも、悪そうな男に」）そしてアドバイスに従い歌を作ってみようとする。

そしてすずは歌を作り、竜の前で歌う。この歌は竜に向けた歌なのだが、一方で自分自身がどうしたらいいのか解らない、その感情を素直に綴った歌のようにも感じられる。

そしてそれはルカちゃんやしのぶ君といった憧れであるが、彼らには敵わない
エディプス葛藤にまつわる情緒であり、そこに向き合おうとする（ルカちゃん
や、しのぶ君と対等に関わりたい）が、憧れや嫉妬に伴う様々な情緒が溢れ出て、
すずは驚き、混乱し、素直に自分の思いを表出できない苦しさを歌っているよう
にも感じられる。

→そしてルカちゃんとの関わりが始まる

3) ルカちゃんとの対話

学校帰りの駅で待合室のベンチで座っている。そしてすずの存在に気づくと立
ち上がり、すずに近づく。

ルカ：すずちゃん

すず：…ルカちゃん…

ルカちゃんはなにか切羽詰まった様な表情をしている。

二人は停留所を降りて沈下橋まで歩く

ルカ：座礁しちゃった。

すず：座礁？

ルカ：鈴ちゃんが応援してくれたから、勇気を出して船出しようって

すず：うん

ルカ：でも好きな人の前だと、何も話せなくて。

すず：うん

ルカ：そしたらその人、『なに、そのリアクション、キモいんですけど』って…

…。

すず：ええっ！！何それ！！

ルカ：ううん。言われても仕方ないの。私が全然自信がないのが悪いんだし、実

際キモいし……。

すず：そんなわけないよ！そんなのひどいじゃん！もうっ！！しのぶ君ひど

い！！

ルカ：え、違う違う

すず：あれ？……じゃあ？

ルカ：……ちかみくん

すず：ちかみって？

ルカ：ち、かみ……しん、じろう……

すず：カミシン！！！！

その後、ルカちゃんとすずは自宅の縁側で二人腰をかけて語らう。

ルカ：すずちゃんが誰が好きなのか、わかつちゃったな

すずは焦って手で制す。

すず：あ、ダメ、言わないで死ぬから

ルカ：うん。でも、いつから？

すず：6さいのとき、『僕がまもってあげる』って言ってくれた。最初にそれを聞いて私、プロポーズされたと思って。でも、本当は、『いじめる奴がいたら守ってあげる』って意味だった。プロポーズなんかじゃもちろんなくて。

すず：母が亡くなって、泣いてばかりいたから、クラスの子みんな怖がって誰も近寄れなかったの。それで、いじめられてると思ったんだろうね。だから……。

ルカ：ちょっと変なこというけど、わたし、その人のこと、なんだかお母さんみたいだなあって思ってたんだ。

すず：お母さん？

ルカ：だってなんにもないのに『大丈夫？』とか『平気』とかいつも聞いているでしょ？男子なのに不思議だよね、しのぶくんって……。あ、いっちゃった。フフ

すず：ハハハ。死んだ。

そして二人で笑う。

【考察】

『U』の中ですずの As であるベルが竜と情緒的交流をすることで、現実の世界のなかですずは徐々に自身に向き合い、エディプス葛藤に向き合おうとする。その中でルカちゃんに会い、ここでルカちゃんが完全無欠のヒロインではなく、彼女もすずと同様にコンプレックスを抱えた一人の女性であることを知る。それはすず自身が、抑うつポジションを受け入れつつあり、成熟したからこそ知ることができたと感じられる。

なぜなら、もし成熟できておらず、殻に閉じこもったままであれば、そこまでルカちゃんがしんみりした感じで、すずに語ることもなかったし、もし語ったとしてもすずはその言葉を真意と受け入れられず、「(ヒロインである)ルカちゃんがそんなこと思うわけない」と感じたのではないだろうか？つまり同じ立場の人であると受け入れられなかったのではないだろうか？

その後、ルカちゃんはカミシンに思いをつげて、受け入れられ、付き合うことになる。

4) ジャスティンとは？

ジャスティンは『U』の正義と秩序を守ると主張し、その世界を脅かす竜を追っている。

多数の企業とスポンサー契約しており、As を強制的にアンベイルする効果がある緑色の石を持っている。

「引き締まった筋肉の堂々たる体軀は強さと勇ましさを思わせ、それを包むバトルスーツは、高潔な人格を想像させた。まさにヒーロー、英雄、偉丈夫、正義の味方、救世主に呼ぶに相応しい（小説版）」

ジャスティンはすずのにとっての超自我的側面であるように感じられる。すずはこれまで、自身の強い超自我に支配され、ある種その強固な枠を自分で作り出し、窮屈な生活を送ってきたと考えられる。

超自我とは？

自我を観察し、命令を与え、裁き、処罰によって脅かす存在。肛門期からエディプス期にかけて形成されていく。

ジャスティンが竜を捉え、竜の城を崩壊させたように、これまでのすずは自身の強い超自我により、自身の中にある孤独感や怒り、そして寂しいという情緒を悪い内的対象と捉え、そういったものを撲滅させようとしてきたように感じられる。

しかしベルがジャスティンの尋問に対して竜の住処を教えることを拒絶したようにすずは、これまでの強烈な超自我の在り方に疑義を感じ、すずの自我がその超自我に対して抵抗しているように感じられる。ある種、内的な世界での反抗期のようにも感じられる。

5) 自分を『U』のなかでアンベイルするということ

すずは、『U』のなかでベルとして振る舞い、歌姫として周囲から評価されるなかで、徐々に自信を取り戻し、「月の裏側」のような存在だった彼女が、「お日

様のように皆が集まってくる」とうてい近づけない対象と考えていたルカちゃんと対等に関われるようになる。

一方でしのぶ君に『U』の中のベルとすずが同一であるということを見抜かれてしまい、すずは非常に動揺してし、しのぶ君がいる場から立ち去り、泣き崩れてしまう。その前にジャスティンに竜の住処を教えないとアンベイルするぞ！と脅迫したシーンがあったが、そのこととなにかリンクしているように感じられる。

【考察】

『U』の中でベルとして振る舞うことは、ある意味、すずが幼少期に鍵盤アプリという対象を発見し、それを自分のものとして、使い、母に見守られながら、音楽を作り、歌い、遊び、徐々に外的現実に触れていこうとする様であった。そこから徐々に外的現実にはすずは触れていった。そして自身のエディプス葛藤にも向き合い、ルカちゃんと対等な存在としてすずは成熟しようとしているように感じられる。しかし一方で、『U』の中のベルはすずにとっての万能空想であり、

それは自身の幼児性の部分であり、『U』のなかのベルと現実世界でのすずとの間でアイデンティティの確立がまだできていない状態であったと考えられる。

そこをしのぶ君に直面化され、すずは混乱し、取り乱したものと考えられる。

そこでヒロちゃんから『U』の中で竜が大変なことになっているという知らせを受ける。

『U』の中では、竜の城がジャスティン達によって焼き払われ、竜が行方不明になってしまう。ベル（すず）は心配になり、現実の As として竜を、ヒロちゃんとネット上で、探し求める中で、配信中の動画で恵が竜であることを知るが、一方でその弟、知とともに父に虐待されていることを知り、どうにかコンタクトを取ろうとするが、すずのままの姿ではベルであることを信じてもらえず、彼らに疑いの目をもたれてしまう。どうするべきかヒロちゃんたちは考えあぐねていた時にしのぶ君からすずの姿で歌う様強い促しを受ける。そのことですずは苦悩する。

恵君たちが父から虐待をうけている現場を目の当たりにしたすず達は、彼らを助けようとするが、彼らにつよい不信感を持たれ、通信が遮断されてしまう。

そこからのシーン

すず：どこにいるの！？ 返事して！

ヒロ：信用されていないんだよ！！ ……（絞り出すように）どこにいるかなんて、絶対に教えないよ。

ルカ：どうしたらいいの……？

しのぶ：素顔のまま、歌う

中略

しのぶ：ベルじゃなく、すずのままの姿で呼びかける

ヒロ：ハァ！？ ちょっと何いってんの？しのぶくん！！

しのぶ：もう一度連絡をとる方法は、それしかないと思う

ヒロ：ねえ何言ってるの！？ それがどういうことかわかってる！？ すずが

今まで積み上げてきたものが全部ゼロになっちゃうんだよ！

すず：ああっ……

鈴は机に両手をつき、がっくりうなだれる

しのぶ：でも信用してもらうには、それしかない。

ヒロ：すず！！ あんた今まで何のためにやってきたの！？ 昔のダメな自分に戻っていいの？元の泣いてばかりいる自分に戻っていいの？それでもいいの？

すず：うううううううう！！ あああああああああ！！

鈴は言葉にならない懊悩（おうのう）の唸り声を絞り出し、激しく首を振り続ける。

しのぶ：彼らは自分の正体を事実上明かしてしまっている。すずが仮面をつけたままで、彼らに一体何ができるの？素顔を隠したままで、何が伝わるというの？

考え抜いたすずは、『U』の中、ベルの姿でいた。ベルは突然ジャスティンの右腕を掴み、右腕のブレスレットについたレンズ体から緑色の光を放出させ、自分にその光を浴びさせ、ベルのオリジン、すずの姿を『U』内で曝け出す。

ヒロ：必死に守ってきた私たちの秘密が……

しのぶ：曲を流すアプリって、これ？

机の上のノートパソコンをしのぶは操作する。

ヒロ：ハッ！？ やめてっ！！

しのぶ：すず。 すず、歌って。

ヒロ：できないよ！！素顔でなんて歌える子じゃないよ！！

ヒロちゃんはしのぶ君の腕を激しく揺らして止めようとする。

しのぶ：歌えるよ

ヒロ：歌えるわけない

すずは『U』の中でやさしく、そっと歌い始める。

【考察】

『U』で竜の姿であった恵君とコンタクトを取るには自分の本当の姿を曝け出すことが必要だと、しのぶ君はすずに提案する。それはすずがヒロちゃんとあたためてきた潜在空間を白日のものとさらすことを意味する。それは潜在空間を捨

て、すず自身が主体性を確立し、現実世界に向き合っていくことを意味する。それは思春期のすずにとって、これまで回避してきたエディプス葛藤に向き合うということの意味する。ここでヒロちゃんとしのぶ君のやりとりが興味深い。

この二人のやりとりはヒロちゃんはある意味「まだすずがエディプス葛藤に対峙するのは無理で、素顔のまま歌うということは『U』の世界に居続けることはできず、母の死の時と同じ様に潜在空間の剥奪につながり、元に戻ってしまう」と危惧し、ある種まだ子供の自立を受け入れられない母の姿であり、しのぶ君は「すずはもう十分に大人になったのだから、潜在空間はいらない。エディプス葛藤に向き合う力はある。」と社会に出ていくことを促す父親の姿の样にも感じられる。今までしのぶ君は母的存在であったのが、ここでは父的存在に変わっている様に感じられる。